

稀有な水路開削の土木史にも遭遇する、歴史道

# 大和街道を訪ねて



徳川頼宣の母が建立した地蔵の辻の地蔵尊



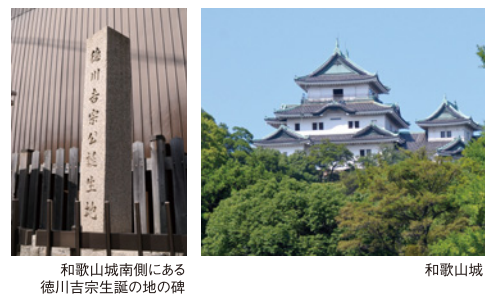
船戸の渡し場跡(南側) 石灯籠が目印



船戸の渡し場跡(北側より) 紀の川の堤防から対岸を臨む



万葉の時代は、大和朝廷と紀州を結ぶ重要な街道として  
平安時代は、高野山を開山した空海が通り、  
江戸時代には参勤交代の道として栄えてきた大和街道。  
そこには、移りゆく時代とともに、  
産業や暮らしの発展に貢献した偉人たちの足跡が残されています。  
大和街道に足を踏み入れ、その歴史を辿ってみました。



和歌山城南側にある徳川吉宗生誕の地の碑

和歌山城

## 大和街道の歴史

和歌山市京橋を起点に、紀の川と平行して東西に通る大和街道。かつて都が奈良に置かれていた頃、都と各国を結ぶ街道の一つであり、歴代天皇の行幸の道でした。  
その後、大和街道は紀州徳川家の初代藩主・徳川頼宣(家康十男)の入国により整備され、町人や商人の交流の道として栄えました。さらに江戸時代(主に前期)には、紀州大名の参勤交代時の街道として、三重県松坂城下を経て江戸へと続くこの経路が利用されていました。(江戸後期は大阪まわり東海道ルートに変更された)



当時の様子を模した駕籠(京橋)

## 紀州出身・徳川吉宗の功績

今回は、和歌山市京橋を起点とする大和街道を紀の川沿いに東へ向かいますが、出発前に、紀州出身の8代将軍・徳川吉宗の生誕の地を訪れることにしました。幼少時代を紀州で過ごした吉宗は後年、水田開発の土木事業で井沢弥惣兵衛、大畑才蔵らとともに紀州(橋本市・和歌山市間)の地域活性化に貢献したことが知られており、その痕跡は大和街道を歩きながら確認することができます(詳細後述)。身長180cm以上の体格で、力士や猪に勝った武勇伝を残す吉宗は、幼い頃から数学も得意で周囲を驚かせていました。藩主になった際には、当時派手な生活をしてきた武士の精神を引き締めるため、着物は木綿、食事は朝夕のみにして「一汁三菜」の儉約生活を徹底させ、正徳6年(1716年)に進めた「享保の改革」で見事に当時の幕府の立て直しを図りました。その手腕は、今日でも高く評価されています。  
和歌山城の南、報恩寺近くの住宅街の路地に、吉宗の碑がありました。愛する紀州の豊かな自然の中で、庶民の意見を施策に反映させるべく目安箱を設けるなどして地域活性化に努め、質素で堅実な暮らしこそ良しとする生き方を映しているかのようでした。

## 川を船で横断した痕跡を発見

大和街道の出発点の京橋には、歴代紀州大名の参勤交代を歌った有名な「鞠と殿さま」の歌碑がありました。平穏な状況を歌っているかのようなこの歌は、実は頻繁に行われていた大名行列の前に手鞠を落とし、切り捨てられた幼子が鞠に乗り移り、見ている光景とされています。



JR岩出駅近くの道標を頼りにさらに進むと「大和街道踏切」に出る

橋の上には手鞠と大名行列の駕籠の模型が当時を偲ばせていました。  
国道24号に入り、白壁の嘉家作丁の街並みを過ぎると大和街道と大坂街道の分岐点、地蔵の辻に。罪人はこの辻で地蔵尊に手を合わせ、処刑場に向かったといえます。さらに東に進むと四箇郷一里塚がありました。進んだ距離を把握するため、こうして一里ごとに設けていた塚も、現在その多くは痕跡をとどめていません。大和街道は国道24号や県道と重複する箇所も多いのですが、道標の石碑や地図で辿っていくと、面影を残す街道を感じることができます。

道が紀の川の堤防に出ると、船戸の渡し場跡に到着しました。石灯籠の横の路地を入ると、目の前に紀の川が広がります。ここから対岸まで、当時は船で渡ったとされます。宿場町として賑わい、参勤交代の際にはかなりの大人数を運ぶわけですから、さぞ大変だったことでしょう。岩出橋を渡り対岸に行くと、そこにも大和街道の道標があり、さらに大和方面への細い道が続きます。

## 紀州藩主の常宿に到着

大和街道は、粉河町井田で四国へと続く淡路街道に分かれ、さらに進むと高野辻で高野山の参詣道である四国街道に分かれます。常夜灯には「弘法大師永代常夜灯」の文字が刻まれ、高野山への道案内が彫り込まれていました。名手の集落に入ると、昔ながらの町並みが続き、大和街道沿いに名手本陣がありました。紀州藩主は、ここで参勤交代や鷹狩の際に宿泊したそうです。



大和街道、西国街道の分岐点、高野辻の常夜灯

名手本陣跡 懐かしい雰囲気の旧道風景が続く





華岡家の墓

華岡青洲が使用したとされる石の手術台

## 先進医療で人々を救った、 医聖・華岡青洲の足跡

紀伊国那賀郡名手荘西野山(現在の紀の川市西野山)に生まれ、医療の新たな時代を切り開いた華岡青洲の足跡も、大和街道付近で確認できます。手術による患者の苦しみを和らげるべく麻酔薬の研究を始めた青洲は、実験対象にした母の死、妻の失明という犠牲の上に独自の麻酔薬を完成させました。世界初の全身麻酔による手術(乳がん)を成功させた青洲の実話は、小説にもなり広く知られています。

名手の国道24号から県道127号へ入り北上し、華岡家の墓がある華岡青洲顕彰記念公園に立ち寄りました。途中の道には、青洲が手術台として使用したとされる石の台があり、その表面の凹凸に診察や手術を受けた患者の影を見る思いがしました。

## 樹齢600年の十五社の楠

伊都郡かつらぎ町笠田で、JR和歌山線と国道24号の中間を通る大和街道を歩くと、空に突き出す森のような大木が、民家の屋根越しに見えてきました。街道沿いの妙楽寺の境内にある、樹齢600年の十五社の楠で、近畿一の大樹とされています。徳川幕府が始まった江戸時代の初めに、既に樹齢300年。いにしへの大和街道の賑わいを、この大木はずっと眺めてきたのでしょう。



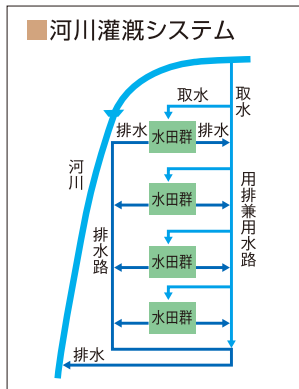
幹回り約13.5m、樹高約20mの楠の大木。

## 藤崎井・小田井用水路で、 大畑才蔵の偉業を再確認

大和街道の周囲には、数多くの農業用水路が張り巡らされていました。中でも豊かな水量の紀の川を水源とする藤崎井、小田井の用水路による利水開発は有名で、小田井の水路開削は、農政に携わっていた大畑才蔵が徳川吉宗の指示で行ったものです。

工事の目的は、米や作物の自給力を向上させるため。農民が納める年貢の負担が増し、約3年周期で不作に見舞われていた当時、吉宗は自然環境に左右されない仕組みをつくるのが民の救済と地域の発展につながると考え、その重責を才蔵に託し、才蔵はそれを卓越した技術と手腕で実行していきました。この水田開発や用水路工事の充実で、農業環境は著しく改善され、吉宗や才蔵の功績は今も極めて高く評価されています。

その藤崎井、小田井の用水路は、ほぼ大和街道、国道24号と並行に設けられており、現在でも道中で確認できる場所がいくつもあります。水路の上に住居がある場合も珍しくなく、水路が人々の生活、産業に密接に関わっていた当時の様子が目に浮かぶようでした。東に進んでいた大和街道を西に戻る形で北上し、粉河寺にも立ち寄りました。境内の庭園には、才蔵の偉業を称え、大正14年に建立された彰功之碑が。その碑の大きさからも、地域への多大な貢献が伺えました。



粉河寺の石碑



現在の藤崎井用水路。水田への誘導水路として今も健在



藤崎井と並行する小田井用水路。住居の下を通る場所も珍しくない

### 大畑才蔵 (1642~1720年)

寛永19年(1619年)伊都郡学文路村(現在の橋本市)に生まれる。吉宗同様、算数が得意で、河川工事の水盛り<sup>\*</sup>御用に関わる。元禄9年(1669年)55歳の時、紀州流土木構法を伝えた井沢弥惣兵衛から紀州藩の役人に指名され、紀州藩内外(吉宗が当時与えられていた越前56ヵ村も含む)の調査を行う。水路設計の専門家として、藤崎井、小田井をはじめ、紀州の多くの河川用水路工事責任者として陣頭指揮した。  
※建物の水平を出す測量作業(この当時は水を使用し計測していた)



大畑才蔵生誕地学文路碑

### 橋本市郷土資料館

大畑才蔵が独自に考案した画期的な測量法や、自ら作成・使用した各種用具の数々は橋本市郷土資料館で実物を見ることができます。



館内には、才蔵直筆の計画書、水盛り(測量)作業図、折りたたみ尺、コンパス、墨坪などの貴重品を展示

## 女人高野の慈尊院から、小田井堰へ

JR高野口駅近くで国道24号を右折。紀の川を渡り河南大和街道を横断して、世界遺産に登録されている慈尊院を訪ねました。開山した高野山は女人禁制のため、信仰の深い母が訪ねても入山を許さなかった弘法大師ですが、慈尊院で暮らす母が亡くなると弥勒菩薩を安置。それ以来、女人の高野参りの場として親しまれてきました。境内には乳房を模したものが奉納されており、子授け、安産、乳がん撲滅祈願などで、今も多くの女性が訪れているそうです。



弘法大師の母が晩年暮らした慈尊院

慈尊院から紀の川沿いに東へ向かうと、農業用取水堰である小田井堰の全景が見える場所に着きました。紀の川の全幅にわたる大型堰の眺めは壮観。徳川吉宗と大畑才蔵も、ここから同じ風景を見ていたのでしょうか。79歳で生涯を終えた大畑才蔵の墓は、生誕地でもある橋本市学文路にあります。その麓の、紀の川を一望できる国道370号沿いに立てられた大畑才蔵生誕地学文路碑は、今も紀州の繁栄を見守っているかのようでした。



魚が遡上する魚道も設けられている小田井堰

## 広域的な幹線道路交通網の時代へ

平成19年に開通した橋本道路は、今回の旅で通った大和街道(国道24号)の交通混雑緩和のため、紀北西道路と紀北東道路<sup>\*</sup>、五條道路間に接続する形で整備され、総距離120kmに及び京奈和自動車道路の11.3kmを担っています。

橋本IC付近で、国道371号バイパスと南海高野線の上を橋本道路の高架橋が横断するさまは、かつての大和街道がさらに発展し、今後の地域に多大な貢献をもたらす広域交通網の一翼を担っているかのようで、心強く感じました。

※それぞれ平成27年度、平成25年度に供用予定



交差する橋本道路、国道371号、南海高野線

取材協力:資料提供:橋本市郷土資料館